

## 態度理論における Summation 説と Balance 説の実験的研究

山 本 俊 磨

Toshima YAMAMOTO : AN EXPERIMENTAL STUDY OF SUMMATION  
THEORY V. S. BALANCE THEORY IN ATTITUDE THEORY.

### I は じ め に

さまざまな態度概念のなかで、この概念の主要な定義の方向の一つが、いわば「態度成分論」とでもいうべきものにあることは論をまたない。(Krech, D., Crutchfield, R. S., 1948; Rosenberg, M. J., & Hovland, C. I., 1960) (註1)

これに対して Fishbein は、Krech らの3成分 (effective, cognitive, behavioral) のうち、情緒的成分だけを態度的なものとして扱い、他の成分は「信念」と関連させて考えようとしている。(Fishbein, M., 1962; 1963; 1965; 1966など)

彼が、情緒的成分だけを態度として扱おうとするのは、態度の定義を、態度が測定されるテクニックと密接に調和させることによって、正確さや理解が増すことを意図するからであり、また、多次元の概念が厳密な理論において用いられるには、非常な困難をとめない、理論が調査にうつされるとき、ほとんど制御できない問題が生じると考えるからである。

もちろん、態度という概念が、いくつかの成分に分けられるべきでないという、強い理由はない。問題は、態度という言葉に制限した意味を付与することによって、「態度」がより有効な科学的述語となるかどうか、態度の研究により生産的な接近が可能となるかどうか、ということであろう。

ここでは、紙数の都合もあるので、Fishbein の態度理論を詳細に検討することはしないが、その主要な論点を示せば、次のようなものである。(註2)

『Osgood, Suci & Tannenbaum (1957) や Fishbein & Raven (1963) の理論的公式化に等しく、態度というものは、「概念の評価的次元」—すなわち、その概念は「good」か「bad」か—として定義され、媒介評価反応として定義される。同様に、信念は「概念の確率的次元」—すなわち、その信念は「probable」か「improbable」か—として定義される』

かくして、Fishbein は、態度と信念の理論を次のように述べるにいたる。

1) 個々人は、何らかの所与の対象に関する多くの信念をもっている。すなわち、多くの異なる特性、属性、価値、目標、概念は、所与の対象に、positive にか、negative に連合してい

る。

- 2) 媒介する評価的反應—態度は、これら「関係づけられた対象」の各々と連合する。
- 3) これらの評価的反應は加算 (Summate) される。
- 4) 媒介過程を通じて加算された評価的反應は、態度対象と連合する。
- 5) 将来の機会に、態度対象は、この加算された評価的反應、すなわち、この態度をひきおこすであろう。

しかし、ここで、彼はもう一点言及して、「加算 (Summation) に有効な評価的媒介反應の量は、信念の強さの函数である。信念が強ければ強いほど、その信念の評価的側面は態度対象とより連合してくる」と留意を求めている。(この点は、後に更に詳しくふれる)

従って、この理論から、個々人の何らかの対象に対する態度  $A_0$  は、次の i), ii) の函数であるとされる。すなわち、

i) 対象に関する人の信念の強さ

ii) それらの信念の評価的側面

数式としては、その態度  $A_0$  は、

$$A_0 = \sum_{i=1}^N B_i \cdot a_i \quad \text{ここで、}$$

$B_i$ : 対象に関する信念  $i$  の強さ。すなわち態度対象が何か他の対象  $X_i$  に関係づけられる「probability」あるいは「improbability」の強さ。

$a_i$ :  $B_i$  の評価的側面、すなわち  $X_i$  の評価、—その「よさ」あるいは「悪さ」

$N$ : 信念の数。(註3)

この仮説を支持するデータとしては、Rosenberg, M. J. (1956) その他のものがあるが(註4)、より適切には、Fishbein 自身の実験 (1963) が挙げられる。ここで彼は、態度対象 (黒人) についての頻度の高い10の特徴で信念ステートメントを構成し、各信念の測度 [B Scale による。得られた平均の B スコアと10の反応の頻度との順位相関は .942であった。N=10,  $P < .001$  尚詳しくは Fishbein, M. & Raven, B. H. (1962) を参照] とその評価的側面の測度 [A Scale による] を得 (従って、 $\sum_{i=1}^N B_i \cdot a_i$  が得られる)、 $A_0$  (その対象に対する個人の態度の測度) との相関をとったところ、彼の仮説を支持して、予言した態度と得られた態度スコアの相関は .801 ( $P < .001$ ) であった。(註5)

以上簡単に Fishbein の理論を見て来たが、次に、ここで得られた態度概念を実験による枠組において考察する。

## II Summation Theory と Balance Theory—その実験による検討—

- 1) 既に述べたように、Fishbein の態度理論において、「加算」とは、ある態度対象に関係

づけられた他の対象に連合している評価的反応が加算されるということであった。そして、この加算された評価的反応が、態度対象と連合する一すなわち、将来の機会に、態度対象はこの態度をひきおこすということであった。

ここで、加算 (Summation) 説の一つの特徴が明らかになる。つまり、加算の過程が、単純な求和の仮定を含んでいるということである。従って、媒介される評価的反応のタイプによっては、態度は、ある部分で、常に「評価」の増加函数となることが考えられる。(図1参照)

一方、Balance Theory によれば(註6)一般的に云って、個人のある対象に対する態度はその対象についての信念の各々と連合した評価(あるいは情緒)の平均化ないし、重みづけられた平均に基づくものと考えられるであろう。

たとえば、適合理論 (Principle of Congruity: Osgood et al., 1957; Osgood & Tannenbaum, 1955) や Heider (1958) の Balance 理論は、態度が評価の増加函数となることを必ずしも予言しない。むしろ、減少函数となる場合も予言されるであろう。(図1参照。評価は  $6 : \frac{6+4}{2}$  の如く) 相違は明らかである。

前者においては、態度の形成・変容の過程が、認知的な Summation と見なされ、一方、後者では、認知的 Balance の過程と見なされているのである。

この点について、前者を支持する直接的なデータは次のようなものが挙げられる。(註7) しかし、これらのデータには、それぞれの欠点がある。

① Fishbein & Hunter (1964) の実験の場合は、態度および態度変容量は、A Scale のみではかられていて、態度対象と他の概念の関係性(信念)の強度が測定されていない。(以下、註7参照) 従って、Fishbein 自らの云うような「Summation に有効な評価的媒介反応の量は、信念の強さの函数である」という見地がここでは無視されている。あるのは、態度対象と他の概念の関係性が学習されたことであって、その関係性についての信念 (B Scale によるスコア) は暗々裡に仮定されているにすぎない。

② Triandis と Fishbein (1963) においては、むしろ、Osgood の適合理論による量的な態度の予言と、Fishbein の理論による態度 ( $\sum B_i \cdot a_i$ ) との比較が主であって、また①におけるが如き、厳密な意味での両者の比較はなされていないと考えるべきであろう。

③ Anderson と Fishbein (1965) は、一応、①②の欠陥を補っている。また、②において用いられた Triandis と Fishbein による Osgood の理論からの公式を拡張したものでなく、Osgood 自らに修正された態度の予言式を使用している。しかし、ここにおいて用いられる態度対象と連合する対象(概念)は、属性形容詞とでもいふべきものであって、Asch, S. E. (1946) や Wishner, J. (1960) のその追試からもわかるように、他者についての印象形成には、選択的な認知的体制化が働き、しかも、特有の形容詞変数(たとえば, warm, cold)によって、印象世界が影響されるという事実がある。

Fishbein と Hunter が、信念の次元で暗黙の仮定をしているように、Anderson らにあって

ては、態度対象 (Mrs. Williams) と他の概念 (honest, friendly, helpful) との間に関係性が成立しやすく、加えて、成立した信念が比較的安定した構造をもつのではないかと考えられる。またこうした構造をもつところの関係づけられた概念の間に、相乗的な補強効果が働くことも推測されないわけではない。

従って、Fishbein のいうように「信念が強ければ強いほど、その信念の評価的側面は、態度対象とより連合してくる」という文脈において、この Anderson らのデータはもっとも妥当し、かつ Summation Theory を支持するものと考えられるであろう。

いいかえると、図1および下段の仮説的な例には、態度対象と、それに関連づけられる概念との間に、それぞれ一定のレベルでのプラスの関係性が成立していたと推測されるのである。

他方、Osgood らによれば、相反する評価を受ける2個の対象 (source および concept) が正の関係性をもっとされるとき (positive assertion) は、この関係性に対する不信 (incredulity) が働き、適合への圧力はあるが、態度の変容自体は減少すると考えられている。(註8)

そして、この二つの対象間の評価のギャップが最大のとき、この不信もまた最大となる。

また、Fishbein の態度の予言式においても、 $0 < a_1 < a_2$  のとき、かりに  $0 < B_1 \leq B_2$  ならば、 $a_1 < a_1 + a_2$  と、 $a_1 \cdot B_1 < a_1 \cdot B_1 + a_2 \cdot B_2$  とは、結果としては同一の現象である。しかし、 $B_1$  と  $B_2$  の関係がこうした制限外にあるときは、 $a_1 < a_1 + a_2$  という結果から  $a_1 \cdot B_1 < a_1 \cdot B_1 + a_2 \cdot B_2$  なる状態を推論することはできない。

以上を通じて、少なくとも二点の問題の存在することが明らかとなるであろう。

(i) 信念のレベル： 態度対象とそれに関連づけられる他の概念との間に、必ずしも安定した関係性が見出されない場合にも、Fishbein の Summation の過程が成立するかどうか。

(ii) 態度対象のレベル： 対人知覚のように、関係づけられる概念をめぐる、比較的選択的な認知の体制化がなりやすいものではなく、個人の準拠枠があいまいであったり、構造化が進んでいない場合の Summation 過程は成立するかどうか。

(i)と(ii)の問題は、ある意味で表裏一体をなすものであるが、態度の形成および変容を、常に単なる認知的 Summation の過程と見るか否かのひとつの分岐点であるだろう。

さらに、態度変容に関する実験のデータによって、我々は、態度の形成・変容に及ぼす種々な条件があることを知っている。

たとえば、態度の特性とその変化について考えるとき、極端な態度をもつ個人は、それほど極端でない態度をもつ個人よりも、認知的、行動的成分 (信念) がより強く、情緒的成分 (態度) もまたより強いと考えられる。

Tannenbaum, P. H. (1956) によれば、説得的コミュニケーションによってひきおこされた態度変容の平均量は、最初の態度の極端度と反対の割合であった。すなわち、態度が極端であればあるほど、変容は小であり、中間領域での受容が大であった。

Kretch らは、態度変容を一致変化 (congruent) と不一致変化 (incongruent) とに分けて、態度変容についての仮説を次のようにたてている。

① 他の条件が同じであれば、一致変化は不一致変化よりも常に容易であろう。

② 態度が極端で、複合的で相互に結びつき、一定で、欲求充足に役立つもので、中心的に価値づけられたものであればあるほど、一致変化は容易であろう。

また、Hovland, C. I., Janis, I. L. & Kelly, H. H. (1953) のコミュニケーションと態度変容に関する一連の実験は、我々にコミュニケーションの外在的問題（コミュニケーションの信憑性）や内在的問題（一面提示、二面提示の問題。不安感情を高めるコミュニケーションの問題）が、態度の変容・形成に深くかかわっていることを教えてくれるし、マス・コミュニケーションの効果研究の中では、構造化されていない論点、殊に既存の態度群と相関していないような論点についての説得的コミュニケーションの有効性については、ことに知られているところである。（Klapper, J. T., 1960）

その他、対象に対する個人の関連性（関心度、自我関与度）の問題など、態度変容の問題は重要なかわりをもっている。態度に関する認知的均衡理論も、これらの文脈において、尚一層その理解が深まるであろう。（註6, 8参照）

かくして、Fishbein の態度理論、就中、その単純化された認知的 Summation の仮定は、留保なくしては受け入れられないと考えられるのである。

## 2) 仮説と実験条件

上の考察に基づいて、本論文では、次の仮説を設定し、これを検討する。

① 認知的 Summation の過程は、態度対象と、それに関係づけられる他の概念・対象との間の関係性（信念のレベル）に依存する。

これは、さらに次の二つの系において考察される。

(i) これら対象間に安定した関係性が成立するときは、態度変容量は、常に媒介的評価反応数の増加函数となるであろう。

(ii) この関係性の成立が不安定であるときは、態度変容量は必ずしも評価的評価反応数の増加函数でなく減少函数となることも可能であろう。従って、結果として態度変容量は認知的 Balance の過程となるであろう。

② ①の結果、態度の形成・変容はある部分で認知的 Summation とまた認知的 Balance の過程の複合したものであり、その結果である。

上の仮説を検証するために、次のような実験状況が設定された。

① ある対象に対する安定した態度が既に形成されているが、操作される条件によって比較的容易に一定方向への態度変容がもたらされること。

② その変容に影響する信念のレベルは、個人によって必ずしも安定したものでないと考えられること。

③ 態度対象と関係づけられる他の概念への評価側面は、総和を考えると、常にこの学習される評価の数の増加函数であり、一方、平均量を考えると、常に学習される評価の数の減少函数であること。

①, ②の条件が満たされるために, 態度対象としては, いわゆる文化的公理 (Cultural Truism), 殊に健康に関するトピックが選ばれた。

ここで, 文化的公理とは, 社会環境内で広く共有されているので, 他から攻撃を受けるのをきいたこともなく, また実際のところ, 攻撃が可能であるとは疑わしく思われるような信念である。(註9)

本実験では, あらかじめ「できれば, 毎食後歯を磨くのはよいことだ」という意見に対する態度を測定し, 被験者群 (中学2, 3年生, 80名) に比較的安定した態度の傾向を見出したので, 「できれば, 毎食後歯を磨くこと」を態度対象とした。

また, ③の条件を満たすために, この態度対象と関係づけられる「望ましくない評価的特性」が調査され, 実験グループとは別のグループで, 特性の「望ましくない」順位づけが行われた。そして, この特性 (10個ある) の中から, 実際の実験には, (i) 歯ぐきに傷がついて口のガンになる。(ii) 歯の神経に傷がつく。(iii) 歯がもろくなる。(iv) 歯ぐきがうすくなる。以上4個の特性が用いられ, それぞれの望ましくない評価の重みづけを  $R_c$  値から, 19:15:13:10 とした。(これらは後に,  $a_1, a_2, a_3, a_4$  とあらわされる特性である)

### 3) 実験手続

被験者は, 中学2年生 (京都市K中学校) 男女各50名。被験者は, Janis, I. L., & Feshbach, S. (1953) の関心・不安スコアを事前に調査され, 各グループとも, そのスコアの平均値がなるべく等しくなるように男女5人ずつ, 5グループに配分された。(註10)

尚, 実験は, 文章の印象による理解テストの形で行なわれ, 被験者は次のようなインストラクションを受けた。

『次ページの文章Ⅰ]～Ⅳ]は, テレビの中学生向け教育番組で, 有名なテレビ・ドクター, 中村博士が「日常生活と保健衛生: 私達の習慣について」という題でお話されたものを簡単にまとめたものです。今日は, テレビで話されるのを, テレビを見ながらきく場合にくらべて, こうして文章にしたものを読むと, 内容の理解がやさしいかむつかしいか, また, どんな書き方をすれば書いてあることがよく印象に残るかということをおみなさんに考えていただきたいのです』

この際, 「有名なテレビ・ドクター中村博士…」が被験者の印象に残るように強調された。

Gr. 0 Ⅰ]～Ⅳ]の文章は二つのパラグラフにわかれ, 「歯を磨くこと」に関するトピックは一切言及されなかった。

Gr. 0 Ⅰ]の文章の後半で, 「毎食後, 歯を磨くと, 歯ぐきに傷がついて, 口のガンになります」というパラグラフが提示された。その他は Gr. 0に準ずる。

Gr. 2 文章Ⅰ]は, Gr. 1と同じ。Ⅱ]の後半に次のパラグラフがあった。「毎食後, 歯を磨くと, 歯の神経に傷がつきます」以下は, Gr. 0と同じ。

Gr. 3 文章Ⅰ], Ⅱ]は Gr. 2と同じで, Ⅲ]の後半に, 次のパラグラフが続いた。『毎食後, 歯を磨くと, 歯がもろくなります』以下は Gr. 0と同じ。

Gr. 4 文章Ⅰ〕～Ⅲ〕はGr. 3に同じ。Ⅳ〕の後半に次のパラグラフが来た。「毎食後、歯を磨くと、歯ぐきがもろくなります。

尚、Gr. 1～Gr. 4にあらわれるそれぞれのパラグラフは、後に  $B_1, B_2, B_3, B_4$  としてあらわされるものである。

かくして、これら Gr. 1～Gr. 4は、認知的 Summation の過程が成立する条件が満たされるとき、Gr. 1<Gr. 2<Gr. 3<Gr. 4のように、「できれば、毎食後歯を磨くこと」に対する態度が、負の方向に変容することが予測される。一方、認知的 Balance の過程が成立するときは、Gr. 1>Gr. 2>Gr. 3>Gr. 4のように態度対象に対する態度が、負方向に変容することが予測される。尚、Gr. 0はコントロール・グループである。

本実験は、次のようなセッションに従っている。

〔Ⅰ〕 態度対象に対する事前の測定値 ( $A_0$  のⅠ。これは A Scale のみによる)を得、関心・不安スコアを測定。

〔Ⅱ〕 各トピックの提示

〔Ⅲ〕 印象度をたずね、態度対象と関連あるトピックについての記憶を確かめる。

〔Ⅳ〕 態度対象に対する事後の測定値 ( $A_0$  のⅡ)を得る。

〔Ⅴ〕 提示された情報を学習しているかどうかを決定するために、「できれば毎食後歯を磨くこと」と関連づけられる特性を再生させる。

〔Ⅵ〕 「『毎食後、歯を磨くと』歯ぐきに傷がついて、口のガンになる」以下4個のステートメントを B Scale 上で測定する。これで信念 (B スコア)を得る。

〔Ⅶ〕 態度対象と連合させられた各特性の評価 (A スコア)を測定する。(Ⅵの B スコアと、この A スコアとから  $\sum_{i=1}^4 B_i \cdot a_i$  が得られる)

〔Ⅷ〕 行動意図 (歯の磨き方を変えようと思うかどうか)を B Scale 上で測定し、関心・不安スコアを得る。

結果の分析は、〔Ⅰ〕, 〔Ⅱ〕, 〔Ⅳ〕, 〔Ⅴ〕, 〔Ⅵ〕, 〔Ⅶ〕および〔Ⅷ〕の関心・不安スコアによった。

#### 4) 結果

##### ① 実験操作のチェック

仮説を検定する前に、異なる予言が二つの説によってなし得る状況を、実験操作が確立するのに役立ったかどうかを決定することがまず必要である。

三つの異ったスコアが各被験に対して算出された。態度対象と連合した「望ましくない評価的特性」の総数、すなわち、再生された特性の数、連合した特性の評価の総和、連合した特性の評価の平均、がそれぞれである。

表1から、大体において、実験操作がうまくいったことがわかる。

態度対象と連合した特性の数は、Gr. 2とGr. 1の間では、5%レベルで有意差はないが、

( $.10 > P > .05$ ,  $t=1.987$ ,  $df=18$ ) 他ではすべて有意差があり、提示された特性の数とともに増加している。

同様に、態度対象と連合した特性の評価の総和は特性の提示数とともに増加している。(ただし、Gr. 4 と Gr. 3 の間では、 $t=2.032$ ,  $.10 > p > .05$ ,  $df=18$ )

さらに、評価の平均に関しては、分散の同質性検定がわずかにならなかったが ( $\chi^2=6.318$ ,  $.10 > .p > .05$ ,  $df=3$ )、一応同質性を仮定して  $t$  検定を行った。結果は、提示される特性の数の函数として、評価の平均は減少する傾向があると認められる。(Gr. 1 と Gr. 2 の差は、 $t=2.083$ ,  $.10 > p > .05$ ,  $df=18$ 。他はすべて有意差がある)

### ② 態度の変容 ( $A_0$ スコアの差)

上の分析によれば、Summation 説の見地からは、態度変容は、提示された特性の数とともに有意に増加することが期待され、Balance 説からは、変容量が、特性の数とともに有意に減少する傾向があると期待されるであろう。

結果の分析に移る前に、一点をチェックしておきたい。すなわち、事前の態度スコア (I の  $A_0$ , A Scale のみによる) は各グループ間に有意差がないので (表 2), 事前、事後の態度スコア (I の  $A_0$  および, II の  $A_0$ ) の差 (態度変容) は、実験の操作によるものだと考えられる。

表 2 からは、態度の変容が Summation の過程の成立する部分と、Balance 説の成立する部分を含んでいることがわかる

変容量の全体の傾向は Gr. 3 > Gr. 2 > Gr. 4 > Gr. 1 > Gr. 0 で、まず、Gr. 3 > Gr. 4 という明らかな結果から ( $t=2.391$ ,  $p < .05$ ,  $df=18$ )、常に Summation 説が成立するとはいえない。Summation 説が支持されるのは、Gr. 3 > Gr. 1  $\geq$  Gr. 0 および Gr. 2  $\geq$  Gr. 1  $\geq$  Gr. 0 であって、Gr. 3 と Gr. 2 の差は有意でない ( $t < 1$ )。

一方、Balance 説は全体的に否定されていると考えるべきであろうが、Gr. 3 > Gr. 4 においてのみ、この説が妥当することがわかる。

これらの事実、Summation 説のみ、ないしは、Balance 説のみが、一貫して態度の変容を説明するのではないことを示唆すると思われる。

態度変容の量とは、補完的な意味をなすものと思われる「できれば、毎食後歯を磨くこと」に対する態度 (セクション [VI] と [VII] から求めた  $\sum_{i=1}^4 B_i \cdot a_i$  のスコア) を見ると、ここでも変容量の場合と同様な対応のあることがわかる。すなわち、全体としては、Gr. 3, Gr. 2, Gr. 4, Gr. 0 の順に非好意的な態度が見られるのである。I の  $A_0$  が、各グループ間に有意差がなかったのであるから、この結果は、実験操作によるものと考えられよう。

この結果、形成される態度は、やはり一貫して、Summation 説あるいは Balance 説のみによって説明可能であるとは思われないのである。(非好意的態度の度合は、Gr. 3 > Gr. 1 > Gr. 0, Gr. 2  $\geq$  Gr. 1 > Gr. 0 のグループ間で Summation 説が支持され、Balance 説が隣接の



グループ間で妥当するのは、Gr. 3>Gr. 4 のみである。尚、Gr. 2 と Gr. 1 との差は、 $t=2.098, .10>p>.05$ )

傾向としては、Summation 説の方がより妥当と思われるが、Gr. 3>Gr. 4, Gr. 2>Gr. 4 の結果は、明らかにこの説に反する。

以上の分析から、態度の形成・変容は、部分的には認知的 Summation 説や Balance 説が妥当するが、一貫していずれか一方の説で説明することは出来ないといえるであろう。

### ③ 信念(B)スコアの分析

Fishbein & Hunter や、Anderson & Fishbein のデータで見たように、これらの実験には、認知的 Summation 説を支持するに有力な二つの条件があった。

一つは、安定した信念の関係性の暗々裡の仮定であり、他の一つは、この安定した信念の関係性が得られやすい実験状況である。

本実験では、実験操作によっては、一応態度の変容を生み出すであろうと思われる態度対象が設定されている。しかし、その態度対象は、対人知覚のように、選択的な認知の体制化が行なわれやすく、中心的概念をめぐって、一つの意味世界が形成されるような性質の概念と関係づけられるのではない。むしろ既存の信念体系や、認知要素とは不協和な関係にいたると考えられるような概念と関係づけられるのである。従って、関係づけられる概念と態度対象との間に成立する信念は、一定のレベルに安定するとは考えにくく、それぞれの概念に対応して個々ばらばらの信念の系が成立するのではないかと想像される。

こうした条件のもとでは、Summation 説が妥当することは疑問であるし、事実、③の結果はそのことを例証するものであった。そして、本実験が、そこに信念のレベルに依存する Summation の過程を仮説として提出した理由がある。

表3から、提示される特性の数(各グループ)の間において、信念スコアの差があり、また、それぞれの特性の間においても差が見られる。(それぞれ、 $F=7.368, p<.01, df=4/45$ ;  $F=4.613, p<.01, df=3/135$ ) また、交互作用は検定されなかったので、一つの特性が他の特性に対する信念のスコアを高めたり、低めたりする効果のないことがわかる。

しかし、各特性間の信念スコアを見ると、 $B_4$  が Gr. 1 における  $B_3$  を除いて、どの信念スコアよりも低いだけで(グループ間に差は見られない)、 $B_1$  と  $B_2$ ,  $B_1$  と  $B_3$ ,  $B_2$  と  $B_3$  の間には、信念スコアの差が見られず、グループ間で信念スコアが異っている。

従って、信念の関係性は全体として  $B_4$  が受けいれられていないが、 $B_1, B_2, B_3$  については、関係性成立の程度は、各グループ間でそれぞれのパターンを見せていて、どの特性がどのように受けいれられるかは、各グループによって若干の差異を示している。

また、信念スコアをグループ間で見ると、Gr. 0 がどの信念レベルでも、各グループよりも大きくない。これは、実験の操作が他のグループのみに受けいれられていることに他ならない。

しかし、他のグループ間では、Gr. 3>Gr. 1, Gr. 3>Gr. 4 なる関係があるだけで、Gr. 1

と Gr. 2, Gr. 1 と Gr. 4, Gr. 2 と Gr. 3, Gr. 2 と Gr. 4 の間には、有意な差がない。

そこで、信念スコアを、その総和について各グループ間で検討する。

その前に、少し、特性の評価について、ふれてみると、表 4 から各特性の評価のスコアは、その特性ごとに異なっていて、特性の提示数（グループ）間には差がない。

これを個々の特性について見ると、それぞれのグループ内で、望ましくなさの順序は、おおむね、 $a_1, a_2, a_3, a_4$  の順である。（ただし、隣接する  $a_1$  と  $a_2$  , および  $a_3$  と  $a_4$  の差は  $.10 > p > .05$ , 各々  $F=3.470, F=3.759$ .  $a_2$  と  $a_3$  の間には有意差がなく、他は有意差がある）従って、各特性の評価的側面が態度対象と関係づけられるときは、いつに関係性のレベル（信念）にかかっている、評価的側面の負荷量が、各グループによって有意に異なることはないであろう。すなわち、特性の提示数の函数として評価の総和は増加し、評価の平均は減少すると考える根拠が得られたのであり、実験の前提が確認されたわけである。

表 3 の、信念の総和による各グループの平均値は、全体として、Gr. 3, Gr. 2, Gr. 1, Gr. 4, Gr. 0 の順に大きい。これは傾向として、 $\sum B_i \cdot a_i$  の各グループの値に酷似している。（表 2 および、図 2 参照）

この信念スコアから、態度対象とそれに関連づけられる特性との間において、Gr. 3 は安定した信念スコアを得ていることがわかる。Gr. 1, Gr. 2 もまた提示される特性の数に応じて、信念のスコアが多くなっている。いうまでもなく、Gr. 0 は提示される特性がないのであるから、信念のスコアは一貫して負である。Gr. 4 においては、提示される特性が 4 個あるにもかかわらず、信念スコアは Gr. 3 よりも低い。

以上を総合的に考察すると、次のようになる。

Gr. 0: このグループには、負の評価的側面をもった特性が説得的な文脈において提示されていない。従って、態度対象に対する安定した態度は、そのままの形で保持されている。

Gr. 1, Gr. 2, Gr. 3 および Gr. 4: これらのグループには、負の評価的側面をもった特性が説得的な文脈で提示された。従って、提示された特性の個数に対応して信念スコアが増加しているならば、安定した関係性が成立していると見るべきである。

ところが、個々の特性に関する信念スコアも、全体としての信念スコアも、 $Gr. 3 > Gr. 1 > Gr. 0$  および、 $Gr. 3 > Gr. 4 > Gr. 0$  なる関係が見られる。前者の例は、上に述べたように安定した関係性が成立しているのであるから、仮説①—(i)に従って、認知的 Summation が成立するであろう。しかし、後者の例においては、 $Gr. 3 > Gr. 4$  の部分において、Gr. 4 の態度対象と関係づけられる評価的反応の間の関係性は、不安定だと見るべきである。従って、この部分には、結果としてむしろ認知的 Balance の過程が成立するであろう。すなわち、仮説①—(ii)が妥当すると考えられる。

予測通り、表 2 から、態度変容の量が、 $Gr. 3 > Gr. 1 \geq Gr. 0$  において、ほぼ Summation の過程に従っていることがわかる。（Gr. 1 と Gr. 0 の差は、 $t = 1.859, .10 > p > .05, df = 18$ ）また、Gr. 3 と Gr. 4 の間では Balance の過程が成立している。（ $t = 2.391, p < .05, df$

=18)

このほか、態度の変容量についてみると、Gr. 2 が Gr. 3 と Gr. 1 の間に位置し、全体として、Gr. 3, Gr. 2, Gr. 1, Gr. 0 の順に変容量が大きいが、Gr. 3 と Gr. 2 の間の信念スコアについては両者に差が見られないので、この間には態度変容量に関して、Summation の過程を予言することはできない。事実、両者の間に変容量の差はなく、Summation の過程は成立していない。 $(t < 1)$

このことは、特性の評価がグループ内においても  $a_2$  と  $a_3$  の間で差がなく (Gr. 2 は、特性の評価  $a_1, a_2$  と、Gr. 3 は  $a_1, a_2, a_3$  と関係づけられるように特性を提示されている)、信念スコアにも差が見られないのであるから、当然のことであろう。

しかし、Gr. 2 と Gr. 1 の変容量をみると、 $t=1.959, .10 > p > .05$  という結果から、Gr.  $2 \geq Gr. 1 \geq Gr. 0$  の部分にも態度変容量において Summation の過程が成立していると考えられるのであるが、信念スコアについてのデータでは、Gr. 2 と Gr. 1 の間に差のある傾向は認められない。

この論文の仮説からは、従って Summation の過程が成立する傾向にあることを説明できないのであるが、特性評価の次元で、 $a_1$  と  $a_2$  の間に差のある傾向が認められる ( $F=3.470, .10 > p > .05, df=1/45$ ) という事情が、ここに寄与しているのかもしれない。もっとも、信念スコア ( $B_1 \sim B_4$ ) と評価のスコア ( $a_1 \sim a_4$ ) の対応は面的でないので、はっきりしたことはわからない。(表 3, 4 参照)

Gr. 4 と Gr. 1 では、態度の変容量の間に差がなく、また個々の信念スコアについても差が認められない。ただ、信念スコアの総和は、両者の大小関係が逆になっているが、ここにも有意な差はない。

態度の変容量が Balance の過程になっているのは、Gr.  $3 > Gr. 4$  の他に、Gr. 2 と Gr. 4 の関係があるが、Gr. 2 と Gr. 4 の間には変容量において有意差がなく、信念スコアの差にも有意性はない。

次に、「できれば、毎食後歯を磨く」ことに対する態度 ( $\sum_{i=1}^4 B_i \cdot a_i$ ) と信念スコア (総和) との関係を検討する。

両者の関係は、図 2 に見るように非常に近接した対応を見せている。

Fishbein による、予言されたこの態度は、既に見たように、非好意的態度の大ききの順に Gr.  $3 > Gr. 1 > Gr. 0$  という Summation 過程が成立していることが読みとれる。(表 2 参照, Gr. 3 と Gr. 2 の間に差はない) そして信念スコアの総和においても、この対応がある。これは、本論文の仮説に支持を与えるものと思われる。

また、Gr. 2, Gr. 1 の態度スコアの関係についていえば、両者に差のある傾向が認められている。 $(t=.098, .10 > p > .05, df=18)$

従って、Gr.  $2 \geq Gr. 1 > Gr. 0$  の部分にも Summation の過程が成立していると考えられる

のであるが、信念スコアで見れば、Gr. 2 と Gr. 1 に有意な差がないので、両者の得られた態度スコアに Summation 過程が成立する傾向のあることを必ずしも説明できない。このことは、態度の変容量と信念スコアとの関係でも Gr. 2 と Gr. 1 の間にみられたのであるが、ひるがえって、再生された評価特性の数(表1)、および Summation 説による評価の負荷量を検討してみると、前者において、Gr. 2 と Gr. 1 の差は5%レベルで有意でなく、後者においては有意差のあることがわかる。(t=1.987., 10>p>.05 および, t=3.547, p<.01, df=18)

これは、しかし、逆にいえば、Summation 説が、態度対象と、関係づけられる概念との間に成立する信念の安定した関係性とは無関係に評価の加算を行っていることにもなるであろう。事実、Gr. 3 と Gr. 2 の間には、信念スコアにおいて有意差がないにもかかわらず、評価の負荷量は Gr. 3, Gr. 2 の間に有意な差のあることが認められるのである。(39vs. 31, t=2.700 p<.02)

表2から、態度の Balance の過程は、Gr. 3 と Gr. 4 および Gr. 2 と Gr. 4 の間に成り立っていることがわかる。(いずれも態度スコアに有意差のあるもののみ)

これを信念スコアからみると、Gr. 3 と Gr. 4 の間では有意な差がある。(16.3vs. 2.7, d.05=9.066) Gr. 2 と Gr. 4 の間では、信念スコアに差が認められない。従って、本論文の仮説からは、両者の間に成立するところの、態度の Balance 過程を説明できないことになる。

しかしながら、ここにおける態度スコアは、必ずしも「できれば、毎食後歯を磨く」ことに対する完全な意味での態度ではない。

本来の態度は、態度対象と関係性をもつ多くの他の対象についての評価的側面を考慮して測定されべきものである。とすれば前にみたように、Gr. 2 と Gr. 4 の間には、態度の変容量において差が認められなかったのであるから、この場合の両者の態度の有意な差は、本論文の仮説と根本的に矛盾するものとは考えられない。

たとえば、Gr. 3>Gr. 1>Gr. 0 において成立する Summation の関係、Gr. 2≥Gr. 1>Gr. 0 において Summation 過程が成立する傾向のあること、さらに、Gr. 3>Gr. 4 において成立する Balance の関係などは、すべて態度の変容量と、個々の特性を考慮した態度スコアとの両方において、それぞれ Summation 過程や Balance 過程が成立し、あるいは成立する傾向にある。換言すれば、この Gr. 2 と Gr. 4 の態度スコアの差に見られるのは、部分的な矛盾であって、「複合的な態度の系」における仮説の否定であるとは思われない。

本実験では、態度の変容が何故生じるかについての分析が主たる目的ではない。説得的な文脈において最も多くの、望ましくない特性を態度対象と関連づけられた Gr. 4 が、コントロール・グループに比して、態度の変容量は有意に多かったけれども、態度対象と関連づけられる特性の少なかった Gr. 3 よりは変容量が有意に少なかったメカニズムについては特に分析しない。

ただ、一点をつけ加えると、McGuire は、文化的公理について、数多く攻撃されるグルー

プは、数少なく攻撃されるグループよりも、後の攻撃（1日後）に対して抵抗性を増すという事実を見出している。

彼によれば、これは前にうけた攻撃によって、公理を防御しようとする動機が形成されるからだとされる。

本実験のGr. 3とGr. 4の間に見られる態度変容量や、予言された態度における有意な差に対して、この解釈を援用することは、Gr. 4と他のグループとの関係において必ずしも適切ではないかもしれない。

しかし、Festinger, L. (1957) の認知的不協和の理論や、Rosenberg あるいは Osgood et al. の、いわゆる認知的一貫性の理論が述べているように、「認知要素の変更」や「新しい認知要素の付加」を通じて、認知的不協和の低減がなされるという仮説の文脈において、McGuire の「誘導された抵抗性」に関する上の知見が考察される時、ひとつの示唆が得られるのである。

すなわち、抵抗性の増大するときは、「新しい認知要素」が付加されやすい事態であり、態度対象と関連づけられる概念の間に不信の念 (incredulity) の増す事態であると思われる。従って、このような事態では、信念ステートメントの数は（あるいは信念の数は）、相対的に重要な変数とはならないであろう。つまり、ここに認知の収斂ないしは平均化の過程が成立する可能性が考えられるのである。

逆に、信念スコアの高くなる事態、すなわち、本論文の論法によれば、態度対象とそれに関連づけられる他の概念・対象との間に安定した関係性が成立するとき（従って、提示される特性の数に対応して信念スコアが増加する）、信念の数は重要な変数となるであろう。認知的 Summation 説が妥当すると考えられる所以である。

Janis et al. が、情動的に恐怖をよびおこすようなコミュニケーションの効果を研究した際、「一般的に云って……コミュニケーションに接した後では、強い（恐怖をひきおこす材料をもちこまれたコミュニケーションを提示された）グループは、他のグループよりも、自分の歯の状態をより心配していた」ことが見出され、しかも、このグループは歯の衛生に関してなされた説得的コミュニケーションの意図した方向へは、態度の変容を行なわなかった。

この点のチェックのために、関心・不安スコアが設定されたが、ここでは特に分析の対象としない。行動意図についての分析も省略する。

### III 結論 および 要約

従来の態度理論の概観を通じて、本論文では、特殊な「態度」および「信念」の定義がなされた。

すなわち、態度は、Fishbein に従って、操作的には、「概念の評価的次元」として特性化され、同様に、信念は「概念の確率的次元」として特性化された。また、対象についての信念と、その対象に対する態度との間の関係性は、基本的には、「個人のいかなる対象に対する態

度も、その対象についての個人の信念と、それらの信念の評価的側面との函数である」というものであった。

量的には、対象に対する態度は

$$A_0 = \sum_{i=1}^N B_i \cdot a_i \text{ とされる。}$$

本論文は、理論的、測定的に Fishbein の見解に従うものであるが、「態度は、個人の信念の各々が寄与する情緒（評価）の総和の函数である」という文脈から、態度対象に何らかの他の対象・概念を関連づけることによって、常に認知的 Summation の過程が成立すると予測することには反対する。

本論文においては、

① 認知的 Summation の過程は、態度対象と、それに関係づけられる他の概念・対象との間の関係性（信念のレベル）に依存する。

② ①の結果、態度の形成・変容は、ある部分で認知的 Summation と、また認知的 Balance の過程の複合したものであり、その結果である。

と仮説された。（①は、信念のレベルによって、(i), (ii)二つの系にわかれる）

実験の結果、部分的に対立するデータもあったが、必ずしも有意な差はなく、おおむね上の仮説を支持するものであった。

本論文はまた、態度の形成・変容過程、ひいては、結果としての複合的な態度が、無条件に「認知的 Summation」や「認知的 Balance」の産物でないことを主張するのであって、単に、両者の折衷を意図したものではない。

Fishbein の仮説は、その妥当性に修正を加えられるべきであるが、態度測定の道具としての予言式は、有効性を減じないであろう。

Fishbein らが用いた態度対象や、評価の方向性は、この論文で用いられたものとはかなり相違がある。

また、Osgood et al の SD 法を修正した Fishbein らの AB Scale がここでは主として用いられたが、Tanaka, Y. と Osgood, C. E. (1965)の指摘するように、言語、文化の差異による情緒的意味のシステムの差も考慮にいれる必要がある。これらは今後の課題である。

#### 註

1 態度とは、一般に、学習によって体制化された反応傾向を意味するが、ここでいう成分論とは、いわゆる態度構造研究における態度内構造論にほぼ対比される。詳しくは、田中 (1964)、島田 (1963)、鮎戸 (1965) を参照。

2 Fishbein の「態度」および「信念」を測定する尺度は、Osgood の SD 法を修正したもので、AB Scale といわれている。A Scale には、harmful-beneficial, wise-foolish, dirty-clean, bad-good, sick-healthy などを含み、B 尺度には、impossible-possible, false-true, existent-non existent, probable-improbable, unlikely-likely などの形容詞対が項目としてふくまれている。尚、本論文は、

- 1967年度修士論文として京都大学文学部に提出されたものの一部をまとめたもので、態度概念の詳細にわたる検討や Fishbein の理論に関する研究は本稿では割愛する。山本「態度をめぐる問題—信念・価値意識・行動意図を中心に—」(未発表修士論文)を参照されたい。
- 3 この仮説は、註4でみるように、Rosenberg によって提案された仮説に類似している。しかし、いくつかの理論的、方法論的相違のあることに留意されたい。
- 4 Rosenberg は、価値項目を①満足の源泉としての価値の重要性、②態度対象の道具的機能によって、どの程度まで価値が達成され、あるいは妨害されるかの認知。によって分類し、①、②の両スコアの積をとり、その和と、態度対象へのスコアとの関係から仮説を検証した。
- 5  $A_0$  は、A Scale によって得られた黒人についての A スコア。Osgood らによれば、SD 法による黒人への態度スコアと、Thurstone Scale による黒人への態度スコアとは、.82 の相関を得ている。Fishbein が、A Scale のみで黒人への態度スコアを測定しているのはそのためである。
- 6 広い意味での認知の一貫性理論は、共通の概念として「人は、その対人関係、対人認知、信念、感覚、行為に存在する内的非一貫性を最小にする仕方で行動する傾向がある」という仮説をもっている。よく知られているように、この認知一貫性理論は、Heider, F. (1946) の三要素構造における態度と認知的機構に関する論文に始まった。認知一貫性理論に関しては、Feldman, S. (ed.) (1966), Zajonc, R. B. (1960) を参照。尚、Rosenberg らの認知的均衡および非均衡の例に従えば、本論文における態度対象とそれに関連づけられる評価的特性との関係は、+ P - という関係の非均衡の事態である。また、これを Fishbein の信念のステートメントのタイプで分類すれば、タイプ 3) にあたると思われる。
- 7 本文、以下に述べる①は、図1のような過程が常に成立するように、実験状況が操作されている。態度対象は「未知の人物A」である。尚、関係づけられる概念は、属性形容詞 (positive 評価をうけるもの) で、異ったグループに異った数が提示される。たとえば、「Mr. A is honest」 「—— is loyal」など。Summation 説が支持された。
- ② Triandis らが、Osgood の予言式を拡張して Fishbein の  $\sum_{i=1}^N B_i \cdot a_i$  と比較した。
- ③ Osgood 自らによって、Triandis らによって拡張された式の修正が行なわれたが、この式は、Fishbein の予言式にも、Triandis らの拡張式にも、予言性が及ばなかった。
- 8 Festinger によれば、不協和低減は、①行動の認知要素をかえる、②環境の認知要素をかえる、③新しい認知要素を付加する。などによって行なわれる。Osgood らの incredulity は Festinger の③にほぼ対応すると思われる。
- 9 McGuire, W. J. (1961, 1962, 1964) は、説得に対する抵抗性を誘導する一連の実験を行ない、この文化的公理が、攻撃に対して傷つきやすいことを①その公理の信者が自己の信念を防御することに未経験であり、②公理を防御するように動機づけられていない、ということから説明している。
- 10 Janis らの知見によれば、実験後、関心・不安スコアの高い者は、行動の変容に対して抵抗を示した。本実験では、この点を考慮して各グループのスコアが等しくなるようにされた。

表1 再生された特性の数および  
Sum. 説・Bal. 説にもとづく特  
性の評価負荷量 (平均)

	Gr. 1	Gr. 2	Gr. 3	Gr. 4
再生数	1.3	1.8	2.4	3.2
Sum. 説(総和)負荷	21.6	31	39	46
Bal. 説(平均)負荷	18.4	17.4	16.5	15.0

分散分析表 ▲p<.05 ▲▲p<.01

	再 生 数			Sum. 説負荷			Bal. 説負荷		
	df	MS	F	df	MS	F	df	MS	F
SSb	3	6.926	▲▲ 21.5	3	1103.7	▲▲ 23.29	3	20.83	▲▲ 22.51
SSw	36	0.325		36	47.4		36	0.93	
SSt	39			39			39		

	df	MS	F
Bet. Sub.	39	51.551	19.273
A (グループ)	3	413.01	
Sub. w. Gr.	36	21.429	
W. Sub.	40	231.86	
B (Sum. vs. Bal.)	1	6177.6	▲▲ 231.12
A×B	3	711.55	▲▲ 26.621
B×Sub. w. Gr.	36	26.729	

表2 A<sub>0</sub>(I, II) スコア, 変容量および ΣB・a スコア

	Gr. 0	Gr. 1	Gr. 2	Gr. 3	Gr. 4
A <sub>0</sub> -I	10.8	11.2	10.4	10.7	9.5
A <sub>0</sub> -II	11.2	8.2	3.6	2.2	5.4
変容量	0.4	- 3.0	- 6.8	- 8.5	- 4.1
ΣB・a	51.6	-27.3	-76.6	-106.4	-17.0

分 散 分 析 表

	A <sub>0</sub> -I			ΣB・a スコア		
	df	MS	F	df	MS	F
SSb	4	4.07	< 1	4	36778.2	▲▲ 9.471
SSw	45	5.83		45	3883.1	
SSt	49			49		
Bet. Sub.	49					
A (グループ)	4	75.415	▲▲ 4.45			
Sub. w. Gr.	45	16.958				
W. Sub.	50	22.14				
B (A <sub>0</sub> -I VS.-II)	1	484.00	▲▲ 56.62			
A×B	4	59.575	▲▲ 6.97			
B×Sub. w. Gr.	45	8.549				



表3 個別および総和信念スコア

	Gr. 0	Gr. 1	Gr. 2	Gr. 3	Gr. 4
$B_1$	- 1.7	2.5	4.2	6.9	2.0
$B_2$	- 1.4	2.2	3.8	5.0	2.7
$B_3$	- 2.4	- 0.6	2.5	5.4	- 0.6
$B_4$	- 1.7	0.3	- 1.7	- 1.0	- 1.4
$\Sigma B$	- 7.2	4.4	8.8	16.3	2.7

分散分析表

	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>
Bet. Sub.	49	38.240	
A (グループ)	4	185.388	▲▲ 7.368
Sub. w. Gr.	45	25.160	
W. Sub.	150	35.972	
B (信念)	3	157.993	▲▲ 4.613
A×B	12	24.864	< 1
B×Sub. w. Gr.	135	34.247	

表4 個別および総和特性負荷量

	Gr. 0	Gr. 1	Gr. 2	Gr. 3	Gr. 4
$a_1$	- 7.0	- 6.5	- 7.9	- 7.7	- 6.6
$a_2$	- 6.1	- 5.3	- 6.1	- 7.5	- 5.8
$a_3$	- 5.9	- 6.1	- 5.6	- 6.2	- 5.7
$a_4$	- 5.3	- 4.9	- 4.2	- 4.6	- 5.4
$\Sigma a$	-24.3	-22.8	-23.8	-26.0	-23.5

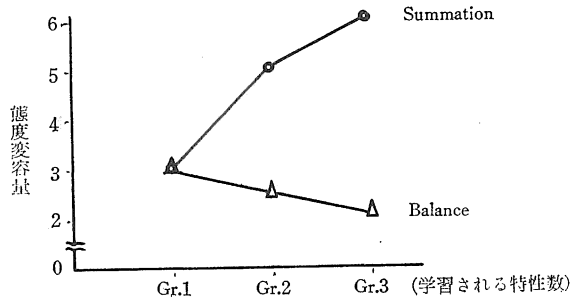
分散分析表

	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>
Bet. Sub.	49	18.478	
A (グループ)	4	3.618	< 1
Sub. w. Gr.	45	19.799	
W. Sub.	150	7.363	
B (特性)	3	43.133	▲▲ 6.233
A×B	12	3.404	< 1
B×Sub. w. Gr.	135	6.920	

図1 Summation と Balance との  
相違のいくつかを示す仮説的な例

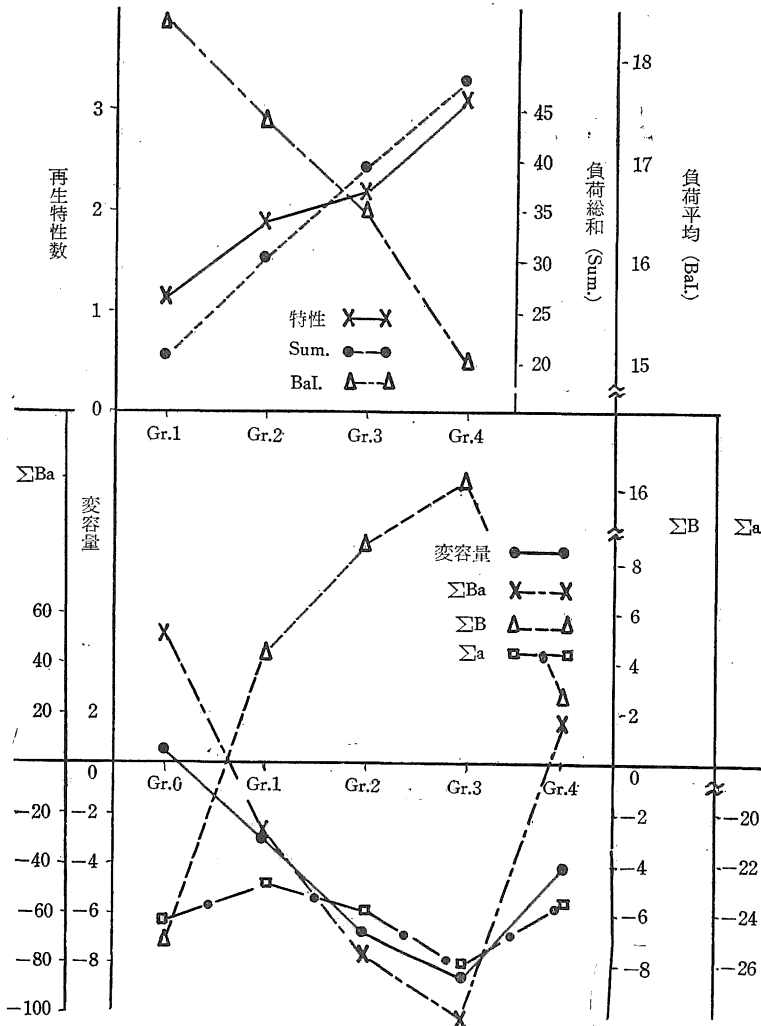
対象 (e. g. Mr. A) に関する信念と信念の評価的側面

Gr. 1		Gr. 2		Gr. 3	
B	$a_i$	B	$a_i$	B	$a_i$
Mr. A is		Mr. A is		Mr. A is	
Honest	+3	Honest	+3	Honest	+3
		Loyal	+2	Loyal	+2
				Successful	+1
$\Sigma a_i$	+3		+5		+6
$\Sigma a_i/N$	+3		+2.5		+2



Fishbein, M. & Hunter, R. (1964) により, 筆者が作成

図2 再生特性数および Sum. 説・Bal. 説による負荷 その他 (下図)



## 参 考 文 献

- Abelson, R. P. & Rosenberg, M. J. Symbolic psychologic : a model of attitudinal connotation. *Behavioral Science*, 1958, **3**, 1—13.
- 鮎戸 弘 態度構造部研究の方法論に関する 諸問題—要因分析との関連を中心に—心理学評論, 1965, **9**, 267—288.
- Allport, G. W. The historical background of social psychology. In Lindzey, G. (Ed.), *Handbook of social psychology*, 1954. (本間康平・高橋徹訳「社会心理学史」社会心理学講座Ⅰ, みすず書房, 1956.)
- Anderson, L. R., & Fishbein, M. Prediction of Attitude from the number, strength, and evaluative aspect of beliefs about the attitude object. *J. pers. soc. Psychol.*, 1965, **2**, 437—443.
- Asch, S. E. Forming impressions of personality. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1946, **41**, 258—290.
- Festinger, L. A theory of cognitive dissonance. 1957. (末永俊郎監訳「認知的不協和の理論」誠信書房, 1965.)
- Fishbein, M., & Raven, B. H. The AB scales : an operational definition of belief and attitude. *Hum. Relat.*, 1962, **15**, 35—44.
- Fishbein, M. An investigation of the relationships between beliefs about an object and the attitude toward that object. *Hum. Relat.*, 1963, **16**, 233—239.
- Fishbein, M., & Hunter, R. Summation vs. balance in attitude organization and change. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1964, **69**, 505—510.
- Fishbein, M. Prediction of interpersonal preferences and group member satisfaction from estimated attitudes. *J. pers. soc. Psychol.*, 1965, **1**, 667—667.
- Fishbein, M. A consideration of beliefs, attitudes, and their relationship. In Steiner, I. D., & Fishbein, M. (Eds.), *Current studies in social psychology*, Holt Rinehart Winston, 1965.
- Fishbein, M. The relationships between beliefs, attitudes, and behavior. In Feldman, S. (Ed.), *Cognitive consistency*. Academic Press, 1966.
- Fishbein, M. (Ed.) *Reading in attitude theory and measurement*. John Wiley, 1967.
- Green, B. F. Attitude measurement. In Lindzey, G. (Ed.), *Handbook of social psychology*, 1959. (城戸浩太郎・富永健一訳「態度測定」社会心理学講座Ⅲ, みすず書房, 1957.)
- Heider, F. *The psychology of interpersonal relations*. John Wiley, 1958.
- Hovland, G. I., Janis, L. L., & Kelley, H. H. *Communication and persuasion*, 1953. (辻正三・今井省吾訳「コミュニケーションと説得」誠信書房, 1960.)
- Janis, I. L., & Feshbach, S. Effects of fear-arousing communications. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1953, **48**, 78—92.
- Katz, D. The functional approach to the study of attitudes. *Publ. Opin. Quart.*, 1960, **24**, 163—204.
- Klapper, J. T. *The effects of mass communication*, 1960. (NHK放送学研究室訳「マス・コミュニケーションの効果」日本放送出版協会, 1966.)
- Krech, D., & Crutchfield, R. S. *Theory and problems of social psychology*. McGraw-Hill, 1948.
- Krech, D., Crutchfield, R. S., & Ballachey, E. L. *Individual in society*. McGraw-Hill, 1962.
- McGuire, W. J. Resistance to persuasion conferred by active and passive prior refutation of the same and alternative counterarguments. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961, **63**, 326—332.
- McGuire, W. J. Persistence of the resistance to persuasion induced by various types of prior belief defense. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1962, **64**, 241—248.
- McGuire, W. J. Inducing resistance to persuasion : some contemporary approaches. In Berkowitz, L. (Ed.), *Advanc. exp. soc. Psychol.*, 1964, **1**, 191—229.

- McGuire, W. J. The current status of cognitive consistency theories. In Feldman, S. (Ed.), *Cognitive consistency*. Academic Press, 1966.
- Osgood, C. E., & Tannenbaum, P. H. The principle of congruity in the prediction of attitude change. *Psychol. Rev.*, 1955, **62**, 42—55.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. *The measurement of meaning*. University of Illinois Press, 1957.
- Rosenberg, M. J. Cognitive structure and attitudinal affect. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1956, **53**, 367—372.
- Rosenberg, M. J. A structural theory of attitude dynamics. *Publ. Opin. Quart.*, 1960, **24**, 319—340.
- Rosenberg, M. J., & Hovland, C. I. (Eds.) *Attitude organization and change*. Yale University Press, 1960.
- Sherif, M., & Cantril, H. The psychology of attitudes. *Psychol. Rev.*, 1945, **52**, 295—319, *Psychol. Rev.*, 1946, **53**, 1—24.
- 島田一男 社会心理学の基底—態度の心理学—大日本図書, 1963.
- 田中国夫 日本人の社会的態度・誠信書房, 1964.
- 田中国夫・松山安雄 態度構造と態度測定の問題・心理学評論, 1965, **9**, 251—266.
- 田中靖政 記号行動論—意味の科学—北川敏男編・情報科学講座C・12・3, 共立出版, 1967.
- Tannenbaum, P. H. Initial attitude toward source and concept as factors in attitude change through Communication. *Publ. Opin. Quart.*, 1956, **20**, 413—425.
- Triandis, H. C., & Fishbein, M. Cognitive interaction in person perception. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1963, **67**, 446—453.
- Triandis, H. C. Exploratory factor analyses of the behavioral component of social attitudes. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1964, **68**, 420—430.
- Wishner, J. Reanalysis of "Impressions of personality." *Psychol. Rev.*, 1960, **67**, 96—112.
- Zajonc, R. B. The concepts of Balance, congruity, and dissonance. *Publ. Opin. Quart.*, 1960, **24**, 280—296.